

第9回 文化交流施設整備検討会【要旨】

日時	令和4年10月7日（金）午後6時30分～午後8時30分
場所	オンライン開催
出席者	<p>（委員） 卯月盛夫委員長、齋藤啓子副委員長、沢木拓也委員 羽生冬佳委員、明戸真弓美委員 土橋圭子委員、松田智子委員、小林行男委員 清水啓史委員、志村博委員、富永新三郎委員 北川嘉昭委員、古瀬清美委員</p> <p>（事務局） 小林文化交流推進課長、文化交流推進課担当 松崎再開発担当部長、能見再開発担当課長 住まい街づくり課担当</p>

1 開会挨拶、委員出席確認

2 議題

(1) 参考施設視察の振り返り

- （事務局） 資料1であるが、前回行った視察について、文化交流施設として参考にしたいポイント等をまとめたものである。

1 か所目の「二子玉川ライズ」の参考としたいポイントは、駅前等の公開空地を活用したアトリウムなどを利用し様々なイベントを行っている点、メディアで情報発信することによりブランディングを行っている点、まち全体を盛り上げることで地域外から人を呼び込み、まち全体の活性化に取り組んでいる点と考えている。

2 か所目の二子玉川ライズ内の「蔦屋家電」の参考としたいポイントは、特徴的なレイアウトや魅力的な展示物に合わせたイベントを実施している点、様々な場面で利用できるカフェや長時間滞在できる居場所空間を充実させている点と考えている。

3 か所目「立川GREEN SPRINGS」の参考としたいポイントは、芝生広場や屋外空間の各所にあるテラス席などで、幅広い世代がゆったりと過ごせる空間を創出している点、商業床の管理運営を一体で行うことで施設のコンセプトを大切にしている点と考えている。

4 か所目立川GREEN SPRINGS内の「PLAY! PARK」の参考としたいポイントは、子どもが「やってみたい」体験を豊富に行っている点、知らない親子同士が交流しやすい空間を創出している点、誰にでも分かりやすいサインを各所に表示している点と考えている。

最後に、事務局として参考となりそうな施設として「多世代交流施設おひさまテラス」を視察したため、共有する。参考としたいポイントは、どこにいても本が手に取れる空間となっている点、クラフトルームやキッチンスタジオ、音楽スタジオなど地域にない機能を施設に設置している点、「あそぶ、つくる、働く、学ぶ、くつろぐ」ことができる空間をたくさん備えており、多世代で交流ができるスペースとなっている点と考えている。

- （委員） 視察した施設は、緑が多く配置されていたため、豊かな感情が呼び起こされた。
- （委員） 自然との共生が出来ており、心が和むすばらしい空間であった。特に立川GREEN SPRINGSは、立川駅から少し離れているが商圈として成

り立っていた。また、PLAY! PARKの床面積が約1,000㎡で文化交流施設の3分の1程度ということで、文化交流施設の広さをイメージする参考となった。

- (委員) ゆったりした空間で利用者がくつろいでいることといろいろな施設が共存できており、それらが相乗効果を生み出しているのではと感じた。文化交流施設だけでなく、再開発全体でも工夫が必要と思った。
- (委員) 施設の魅力をより高めるために自然、屋外、屋上の活用が大切な視点であるということを感じた。
- (委員) 緑の配置については、再開発全体としても関わったほうがいいのではと考えた。優れた施設でも全てを参考とするのではなく、必要な部分を取り入れていけたらと感じた。
- (委員) 二子玉川の再開発は、住んでいる人と東急電鉄が一体となり地域を盛り上げようとしていると感じた。両再開発と比べると西日暮里の再開発面積は狭いため、狭い場所でも有効に使えることを施設へ取り入れ、臨機応変に運営していくことが必要と感じた。
- (委員) 固定せず柔軟な運営を臨機応変にやっていたことが参考になった。
- (委員) 両再開発とも、施設と周囲がグランドレベルで一体化しているという特徴があるのではないか。商業施設の敷地内であるが、あたかもパブリックスペースのようで周辺と連帯した使い方ができているのだろう。緑が多く自然も豊かなため、公園的な空間としても使えるようにしつつ、施設への動線も考え、歩きやすい仕掛けをしていると感じた。両施設と違い、文化交流施設は7階であるため、人が通りやすくなる仕掛けができると良いと考えた。
- (委員) バランスの取れた空間となっており、多世代が長時間過ごせる場が作られていると感じた。文化交流施設にもそうした空間をどのように作りこんでいくのか考える必要がある。

また、両施設とも地の利を生かした施設づくりをしていたため、西日暮里の再開発についても西日暮里らしさがあると多世代に来てもらうきっかけとなるのではないかと考えた。メディアで施設を紹介する際も「ここに行くと、これが見られる。これが西日暮里である」と伝えられるものがあると良い。

- (委員) 民間主導の再開発であるため、全体のコンセプトやデザインの管理などがマネジメントされており、利用者が再開発全体を体感できることも強みとなっているのではないかと考えた。西日暮里の再開発も地域の強みを見つけ、活かしていくことが必要である。

二子玉川ライズは区境にあるため、来館者には区外の近隣住民も多いようである。西日暮里も区境のため、区外の人たちにも関心を持ってもらうことで多くの利用者が見込めるのではないかと考えた。

PLAY! PARKはすてきな空間であったが、利用料金が高く感じた。民間が営業するにはある程度の料金設定が必要と考えられるため、文化交流施設の目指す形が気になった。

- (委員長) 壁面緑化や屋上の利用、緑の多い空間など、緑を取り入れるために様々な工夫が必要である点、ゆったりとした空間やアトリウムがあることにより、多世代が長時間いられる居場所空間が整備されている点、再開発全体のマネジメント管理が民間企業で行われていることも関係していると考えるが、フレキシブルに運営している点、また各施設が地域特性を売りにしていた点から

西日暮里らしさというものを含め一貫性があるものを検討したいと考えた。また、施設内の動線については、視察した施設と比べ敷地面積が狭いため、上下階との縦の動線について検討を深める必要がある。

(2) 前回までの振り返り、文化交流施設のゾーニングイメージ及びイメージパースについて

- (事務局) 資料2であるが、前回の検討会での議論踏まえ一部修正した。続いて資料3-1の説明であるが、再開発施設全体の施設計画が変更となったため、先に参考資料2を説明する。

再開発準備組合で工事費を精査したため、施設計画を一部変更した。これに伴い住宅棟にあった業務フロアを商業棟の10、11階に移動したことにより、屋上の形状がこれまでと変更となった。また、本検討会での意見を受け、文化交流施設やコンベンションホールへアクセスする際のメインとなるエスカレーター等の位置を南側へ変更した。

今回の施設計画の変更を受け資料3-1は、エスカレーター等の位置を変更し、各ゾーンの位置を前回のゾーニングイメージに合わせ移動するとともに、ワークショップ・体験ゾーンの名称を「本物の体験ゾーン」に変更した。また、施設全体を緩やかに仕切るため、S字の緑線を入れ、施設全体のイメージを「屋内の公園空間」にするとともに、各ゾーンの説明に下線部分を追記した。

資料3-2であるが、施設計画変更とこれまでの意見を踏まえ施設外観を再整理した。これらについて意見をいただきたい。

- (委員) 屋外テラスゾーンが増えたが緑の配置や風雨対策はどうなるのか。
- (委員) 高層な建物ができるとう風の流れるが変わるため、屋外テラスでくつろげる状況となるのか不安である。
- (事務局) 緑については、屋外から7階を見た際に緑が多い魅力的な景観とし、行ってみたい空間としたいイメージである。

風雨については、建物が周辺にどのような影響を与えるかを現在検討しているところであり、防風対策を考えていきたい。

- (委員) 例示にVRという記載があるが、施設完成は現時点でも数年後のため、先端技術という記載はいかがか。また、8階へ行ける大階段とあるが、8階のコンベンションホールと繋がるイメージか。大階段となると設置するか否かで7階の大部分に影響を与えると考え。ルートにつぼりの名物を知りとあるが、お店紹介パネルのようなもので知らせる形を想像した。多くの公共施設では、掲示物で情報を出しすぎており、あまり効果的になっていない気がするし、店探し等はネットで行う時代である。そのような方法よりも地域との連携の中で、周辺をどのように知らせるのかを俯瞰して考えた方が良いのではないか。

全体的に具体的な記載すぎるため、抽象的でよいのではないか。

- (委員長) 8階のコンベンションホールでイベント終了後の動線を考えた際、幾つか動線を分けることも必要かと考える。
- (委員) あまり作り込み過ぎると、方向性を失ってしまうのではないかと懸念している。施設完成時期を考えると10年・20年後を見据えた形で進める必要があるため、具体的で分かりやすいが、もう少しコンセプトの話ができる

良い。

日暮里地域は緑被率が区内で一番低いため、外観や屋内に緑を多く取り入れることで視察した施設のように多くの子育て世代にも遊びに来てもらい、文化交流施設が区の賑わいを創成する場となってほしい。銀座等のデパートの屋上でも、緑が多くテラスで食事できる空間もあるため、屋上の活用についても可能な範囲で考えてほしい。

○（委員長） 商業棟の上層に業務フロアが移動するとのことであるが、10年後となると今以上にいい環境のオフィスというのは、労働者の環境に配慮し自然も感じられるようなオフィスとなるのではないか。

○（委員） 自然との共生やゆったりとした空間、施設の可変性についての視察の感想を受け、これまで検討してきたことは共通認識であったと思ったところである。

屋外テラスであるが風除スペースを設けたり、運用方法を工夫することで風対応は可能と考えられ、デパート等の屋上空間のようにできればと思う。8階とつながる階段については、動線という面も含めて相談していきたい。

今回、具体的にいろいろと記載したが、抽象的であることこれまで議論してきたことが把握しにくいいため、現時点で考えられるイメージを分かりやすく記載している。

○（事務局） 屋上の活用については、実現できる形で準備組合と引き続き検討したい。

○（委員） 私の中で今回の再開発はインクルーシブであるべきと考えている。私が考える西日暮らしさとは、荒川区＝下町であり、私が考える下町とは、人情が厚い人がたくさんおり、人情が厚いということはインクルーシブと思っている。そのイメージは、ずっと残ってほしい。

○（委員長） 気遣いができる温かさは人間的であり重要である。

○（委員） 気取らない下町、荒川らしさを施設へ取り入れていただけるとありがたい。

○（委員） 本のテーマパークゾーン、居場所・交流ゾーン、カフェは非常にイメージしやすく、本物の体験ゾーンも日中と土日はイメージできるが、夜間のイメージがあまり湧いてこない。特に夜間は仕事帰りに来る人も多いため、ここでどのようなことができるのかを考えることで設備面も想定できるのではないか。また、ある程度の雑音は必要と考えるが、音の区分けをどうするのか。

○（事務局） ゾーニングイメージの具体的な例示は、確かに昼間や土日のイメージが強い。夜間の活用方法について意見があれば頂きたい。

○（委員） 駅と近いことが夜間利用の強みであり、特に平日18時以降このような場所を求めている人は必ずいるだろう。特に30代女性は自分の可能性を広げたいと思っている人が多く、本物の体験ゾーンはそのようなニーズにも答えられるのではないか。例えば、下町の強みとしての体験や情報の提供として、モノづくりや起業講座を定期的に連続して行うことは効果が高いだろうし、コンテンツとして電車や旅もあると、ただ夜景を眺める施設という使い方だけではないだろう。

また、青少年に目を向けると、ふらっと立ち寄る空間以外に例えば、楽器の練習ができる防音設備のある音楽スタジオは需要があるため、区内の設置数等を勘案し検討するのはどうか。

今回施設計画の変更に伴い、エスカレーターの位置が変わったことで、縦線をデザインしやすくなった。今後、準備組合と情報交換することで下層階にどのようなイメージの店舗を誘致するか全体コンセプトとして、議論していけると上下のつながりが見えてくるのではないかと。

- （委員） 荒川区は青年世代の生涯学習の場が少ない。この施設へ特に、30代の女性層を呼ぶことができれば、成功するのではないかと思う。

この施設は、区が直接運営するとは考えられないため、運営事業者候補を増やすためにも施設の1日の稼働から採算面を考えることも必要な視点である。

- （委員長） 夜は自分を見つめ集中して学べる時間である。例えば、この施設で自分を再発見できるような場があると、特に8階との関係性も出てくるだろう。39歳までを若者と定義し若者支援を行っている自治体もあるため、夜の利用方法として30代の学びにも焦点を当てて考えてもよいだろう。

- （委員） 荒川区は職人が多いため広義な意味でモノづくりを捉え、施設のコンセプトとしてほしいと思っている。そのため、夜間の利用形態として、自己実現を導いたり自己表現が出来る場所というのはいかがか。起業支援や映像、演劇等のワークショップがあると惹かれる人もいるのではないかと。

また、コンセプトを導く10のキーワードの⑨に「誰でも受容する、自分らしくいられる」とあるが、前提条件として外国語対応は必要である。

ゾーニングイメージについてであるが、施設内の高低差を活用し、例えば子どもがミニカー等で高いところへ上り施設を見渡せたり、そのミニカー等の通路も含め非常時の避難通路を考え、非常口と通路を繋げてほしいし、音や調理等での匂いの仕切りについても検討が必要である。

施設外観については、日中帯は緑の多い外観があることで心が惹かれると思うが、夜間は例えば施設名などをネオンサイン等の言葉でアピールするのはいかがか。

- （委員長） 調理等の匂いや郷土料理の話があったが、食は人と人をつなぐ側面もあるため、プログラムとして残す必要があるのではないかと。

（3）周辺地域との連携について

- （事務局） 資料4であるが、これまでの検討で施設の機能に求める視点として、周辺地域との連携を挙げており、今回は必要な4点の視点とそれぞれに考えられる事例を整理したため、意見をいただきたい。

- （委員） 必要な視点を整理したことで、課題は分かりやすくなったが、取組事例の方向性が分かりにくい。期待される効果として目指す取り組みの方向性は2点あり、1点目は周辺の人々の利便性に寄与するための取り組み、2点目は地域住民以外の施設利用者が施設の周辺に関心を向けるための取り組みである。目指すべき方向性から取り組み事例を考えた方がよい。

商店街やモノづくりの体験との連携を例とするならば、長期的な戦略となるが、商店街等が出店するイベント等を定期的で開催し、商売する人が普段と違う客層に触れることで商売や事業に対しイノベーションを起こす機会とすることで、商店街等の人々の意識が変わり、最終的にそれがまちの魅力に繋がっていく場を目指すための取り組みとすることはどうか。どの取り組みについても、企画する側が期待する効果を考え、実施していく必要があるだろう。

- （委員） 施設のゾーニングの話にも通じるが、私が考える下町の夜の顔のイメ

ージは縁日である。例えば縁日で、地域の商店が試作品のマーケティングや学生が本物の体験ゾーンで作った商品を販売すると、施設の魅力がより増すのではないかと話を伺いながら考えた。

- （委員長） 今の意見も取り入れつつ、施設の使い方についてワークショップなどで地域から意見をいただくのはどうか。
- （委員） 日暮里駅では、日暮里繊維街の布などで作った商品を個人ブースで販売したり（公財）荒川区芸術文化振興財団が主催のあらかわ手づくり市があったりし、毎年作品を買っているようなファンもいるため、素敵なアイデアである。

ただ一方で、文化交流施設が区の施設である以上、4つの視点は踏まえる必要があるが、文化交流施設のみで行う必要はなく、建物全体で周辺との連携について考えていかなければならない。これらの視点を意識して施設へ盛り込むよりも、この施設としての魅力を高める方が施設へ来た人たちが周辺地域に向かう結果となると考えた方が、思考の順番としていいのではないか。

- （委員） 再開発のあるべき姿は、地域が再開発されることで恩恵を受ける人たちがそこだけとどまらず、周辺地域へ波及していくことである。周辺地域と様々なことをすることは大変重要ではあるが、それらに捕らわれるのではなく、まず施設の賑わいを作ることが波及効果を生み、地域の新たな賑わいをもたらすことに繋げていくのも良いだろう。
- （委員長） 周辺地域との連携で4つ視点があるが、これまでの議論から子どもや若者との連携の視点も重要と考えるため、周辺の学校等の教育機関との連携も検討いただきたい。

（3）その他

- （事務局） 参考資料1であるが、今後のスケジュールについて説明する。次回の検討会において整備方針の最終報告案を示しこれまでの議論等について整理し、今年度中に最終報告書として整える予定である。